

長岡京跡右京第736次
開田遺跡
発掘調査報告

2002

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

長岡京市では現在、長岡京駅前線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を進めております。これは長岡京駅西口地区市街地再開発事業に関連して、幹線道路の拡幅整備を行うものです。当地域には長岡京跡を始め、神足遺跡、開田遺跡など重要な遺跡が広がっております。ここに報告しますのは、一連の調査の部分的な成果ですが、周辺調査や今後の調査成果とあわせて検討する必要があります。現地調査から整理・報告作業に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

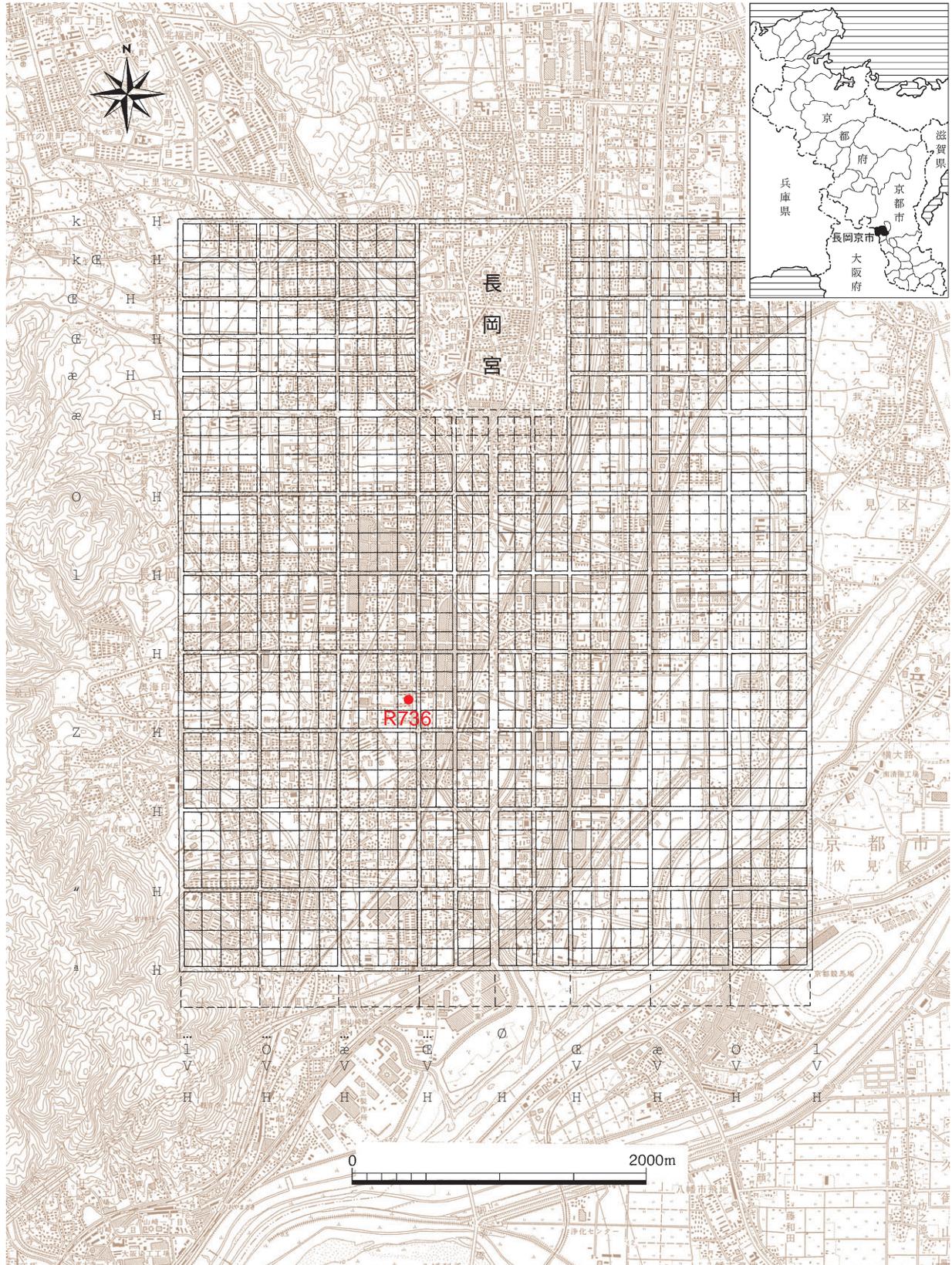
平成14年 9月

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦 田 富 男

例 言

- 1．本書は、長岡京市開田二丁目213で実施した長岡京跡右京第736次調査（7ANKST-11地区）に関する報告書である。
- 2．調査は、長岡京駅前線整備事業に伴うもので、長岡京市建設部広域道路課から依頼を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、原秀樹が現地を担当した。
- 3．現地調査は、平成14（2002）年5月22日から6月10日まで行い、調査面積は88m²である。
- 4．調査次数や調査地区名、および長岡京の条坊名称については、長岡京跡の調査における通例にしたがった。また、地形区分については、「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。
- 5．遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、調査次数を省略している。「SD01」などの場合は、調査次数を冠した「SD73601」が正式な番号である。
- 6．本書の執筆・編集は原が行ない、遺物写真は小田桐淳が撮影した。



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40,000)

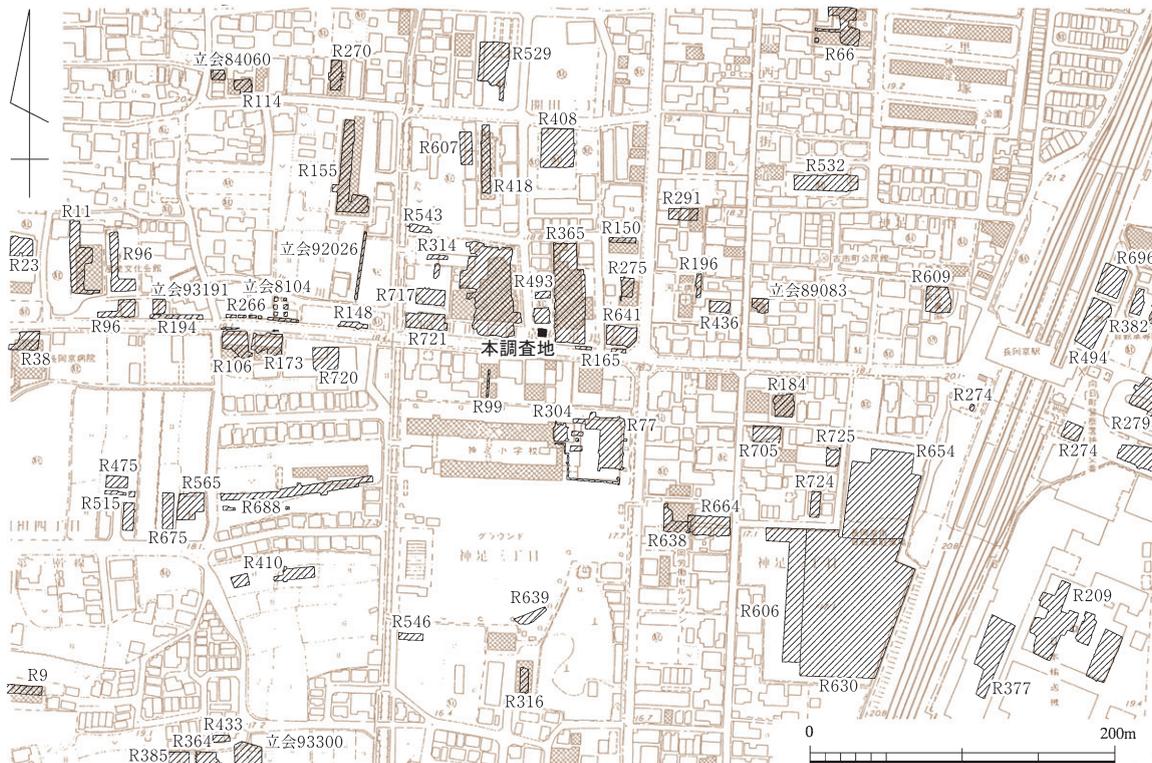
1 はじめに

調査対象地は、JR京都線と阪急京都線とに挟まれた市街地に位置しており、JR長岡京駅から西へ延びる府道開田長岡京停車場線に南面する道路拡幅予定地にあたる。本地点は、小畑川に注ぐ犬川左岸の氾濫原面に立地する。地形分類図によると、面は低位段丘の縁辺に広がる比較的高燥な面に分類されており、歴史時代後半において洪水に見舞われることがあまりなかったところである。付近の標高は、約19mである。

本地点の周辺は、東西の府道沿いに比較的多くの発掘調査が実施されている。長岡京の条坊復原によると、右京六条二坊三町の北東部にあっており、右京第77次、第165次、第314次、第365次、第493次、第721次などの調査では、六条条間小路、西一坊大路の道路側溝と六条条間小路を挟んだ南北の宅地内から建て替えが行なわれた建物を含む小規模な掘立柱建物や柵列、井戸、土坑などが確認されている。また、近年の第688次調査および第630次、第654次調査では、これまでの調査を含めて長岡京の西市が右京六条二坊から七条二坊周辺に置かれた可能性を指摘している。なお、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡である開田遺跡については関連する遺構・遺物は確認できなかった。

2 検出遺構

調査は、東西10m、南北9.5mのトレンチを設定し、重機で路面のアスファルト舗装と盛土層、現代攪乱層の掘り下げを行なった。基本的な層序は、盛土、旧耕作土、灰黄褐色土と暗赤褐色土

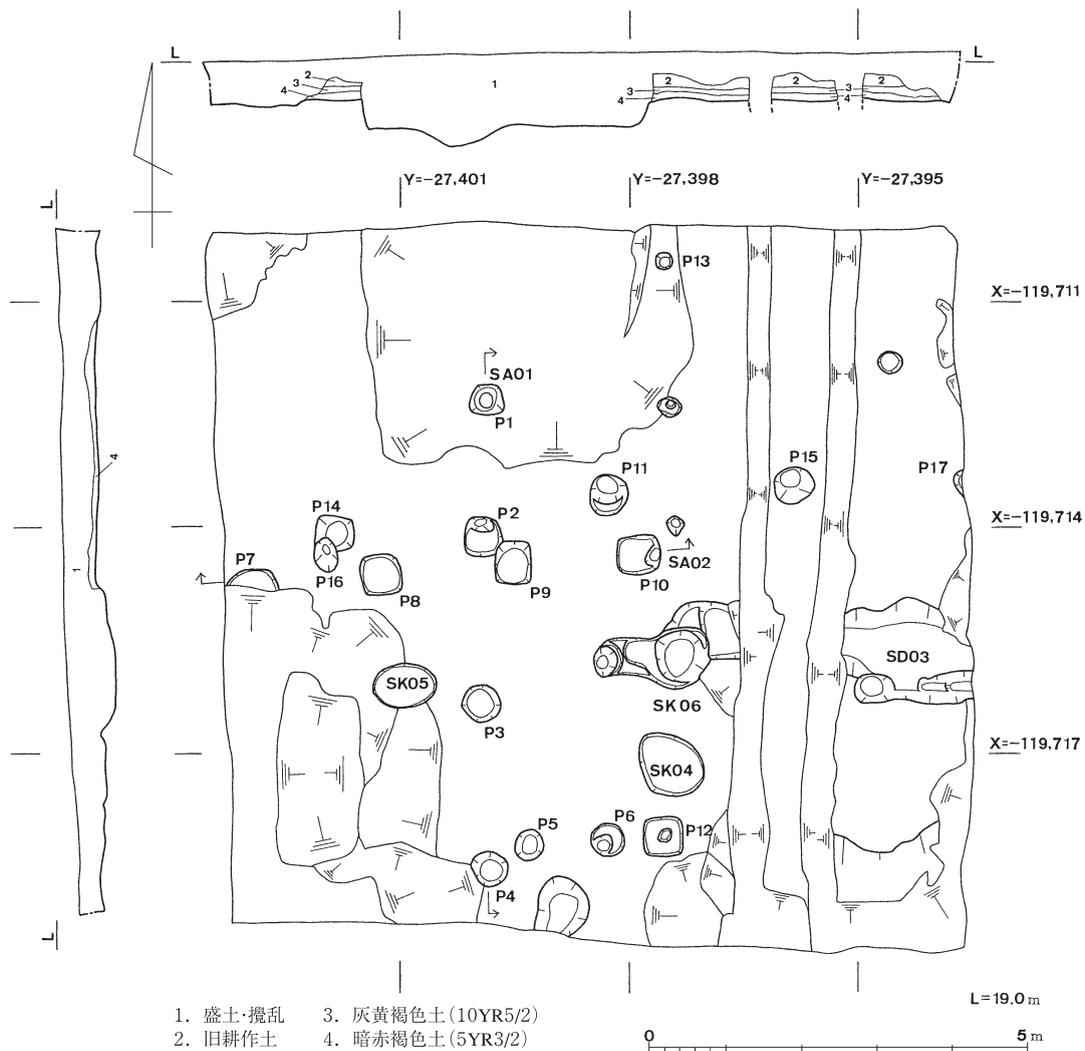


第2図 発掘調査地位置図(1/5,000)

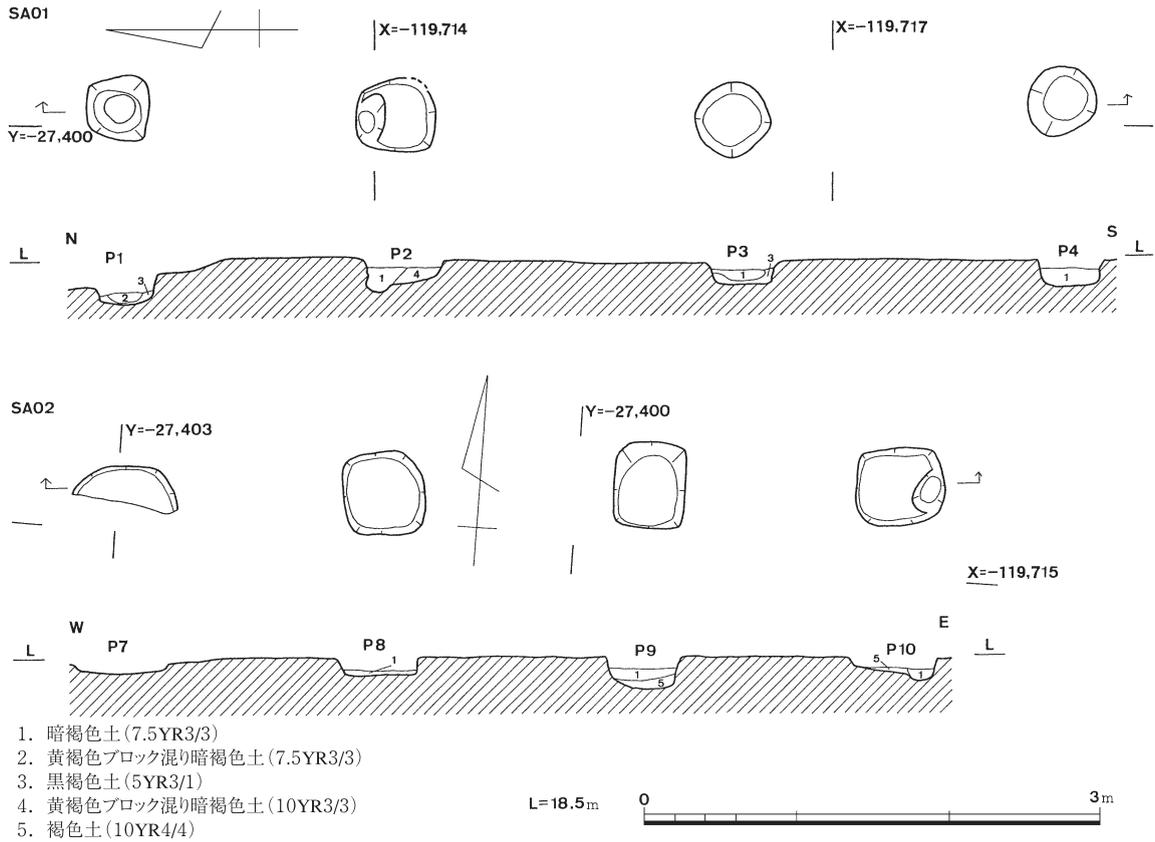
の遺物包含層、地山となっており、調査区南側では旧耕作土以下の包含層は削平を受けて残っていない。現地表面は南側の道路に向かって傾斜しているが、地山面は平坦でその標高は18.4mである。地山は、黄褐色粘質土からなる段丘層で部分的に小礫を多く含む。遺構はすべて地山面で検出したが、旧耕作土と包含層の残存状況からみて後世に削平を受けたことが窺われる。なお、トレンチ東端の南北方向の攪乱溝は使用中のガス管が埋設されており、調査中は土で覆った状態で作業を進めた。

調査では、長岡京期を中心とする柱穴、溝、土坑などを検出した（第3図）。小面積の調査であることから、建物の規模や構造について確認するのは難しいが、各々の柱穴は円形から隅円方形を呈する小規模なものが多い。これは周辺調査地の状況とも符合する。各遺構の残存状況は、全体に浅いものが多い。

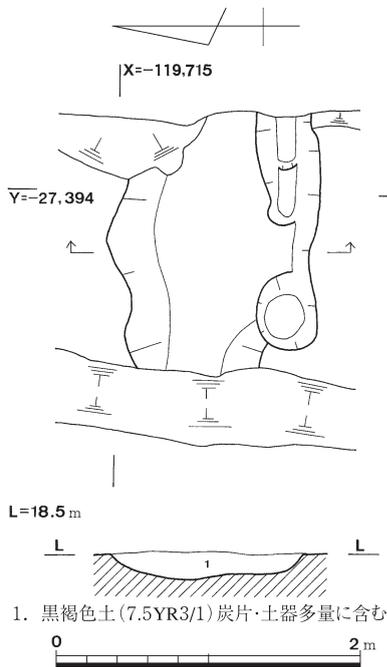
柵列S A01 南北方向に4個の柱穴が並ぶ。一辺0.5m前後のやや歪な隅円方形と円形の柱穴からなる。柱間寸法は、2.1m等間。柱根は残らないが、P2は一段深い円形の掘形が残る。P1に続く北側の柱穴は、現代攪乱が北に向かって深くなることからその有無については確認でき



第3図 遺構図と壁断面図 (1/100)



第4図 柱列S A01・S A02断面図(1/50)



第5図 溝S D03断面図(1/50)

なかった(第4図)。P1、P3、P4から土師器と須恵器の細片が少量出土した。

柵列S A02 東西方向に4個の柱穴を検出する。一辺0.5m前後の隅丸方形と現代攪乱で一部削平された柱穴からなる。柱間寸法は、1.7m等間。柱穴の東端は、現代攪乱で削られた可能性は残るが、これより東には延びない。柱根は残存しないが、P10には小さな円形掘形が見られる(第4図)。P10から土師器の細片が出土した。

溝S D03 東西方向の溝で、トレンチ東壁から現代攪乱まで約1.7m分を検出した。幅1.3m前後で、深さは約0.2m。溝底は西側で上がっており、溝自体は攪乱内で終息するものと考えられる。埋土は黒褐色土1層で、炭片を多量に含む。長岡京期の土師器、須

恵器、製塩土器、土馬などが出土した(第5図)。

土坑S K04 長辺1m、短辺0.8mの楕円形。深さ0.1m前後。土師器の細片が出土した。

土坑S K05 長辺0.8m、短辺0.6mの楕円形。深さ0.1m前後。土師器の細片が出土した。

土坑 S K06 直径約0.8m、深さ0.2m前後。土師器、須恵器の細片と炭片が出土した。

その他の柱穴 P11とP15は、直径約0.5mの円形で、深さは0.3m前後と他の柱穴の中では最も深い。東壁にかかるP17を含めると東西方向の柵になる可能性がある。柱間寸法は2.3mとやや広い。P11から土師器の細片が出土した。この他、P6、P12、P13、P14から土師器と須恵器の細片が出土した。

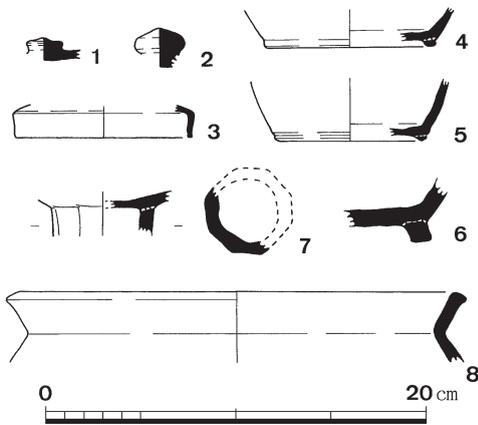
灰黄褐色土 トレンチ北半部分に残る遺物包含層。長岡京期の土師器、須恵器、製塩土器などの他に近世陶磁器を含む。



第6図 調査地全景（東から）



第7図 調査地全景（北から）



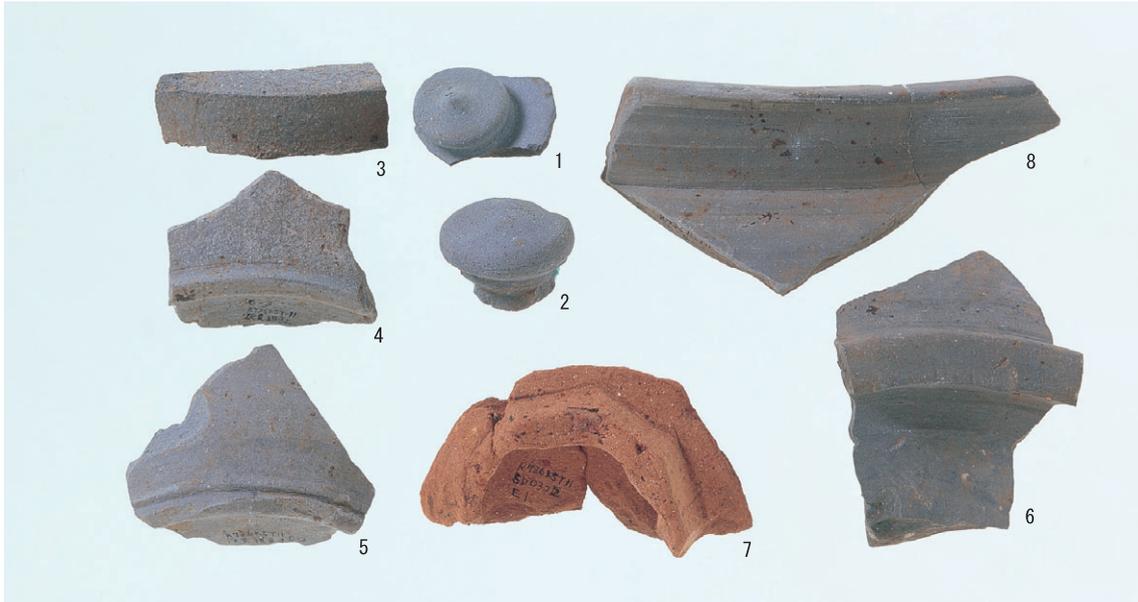
第8図 出土遺物実測図（1/4）

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理コンテナ1箱分である。近世陶磁器、長岡京期の土師器と須恵器、製塩土器、土馬、瓦が出土したが、いずれも細片となっており図示できるものは限られる。量的に最も多いのは長岡京期の土師器であるが、ようやく高杯が図示できた程度である（第8図）。

1・2は、須恵器蓋のつまみ部分。宝珠形の形状から、1は杯B蓋に、2は杯B蓋か壺の蓋と考え

られる。灰黄褐色土出土。3は、壺A蓋の口縁部。口径9.4cm。溝S D03出土。4・5は、須恵器杯Bの高台。高台径は、4が8cm、5が9cmである。灰黄褐色土出土。6は、須恵器壺の高台。小片のため高台径は復原できない。体部外面に叩き目痕跡が残る。灰黄褐色土出土。7は、土師器の高杯脚部。脚部の断面形は外面8角形に復原されるが、内面にもやや鈍いが稜角をもつ面がある。面の数は6～7面と考えられ、心棒に粘土を巻き付ける脚部の成形方法と比べて脚部の器壁は薄い。胎土は赤色粒子を多く含み砂っぽい。色調は明赤褐色。溝S D03出土。8は、須恵器鉢Dの口縁部。口径24.2cm。灰黄褐色土出土。



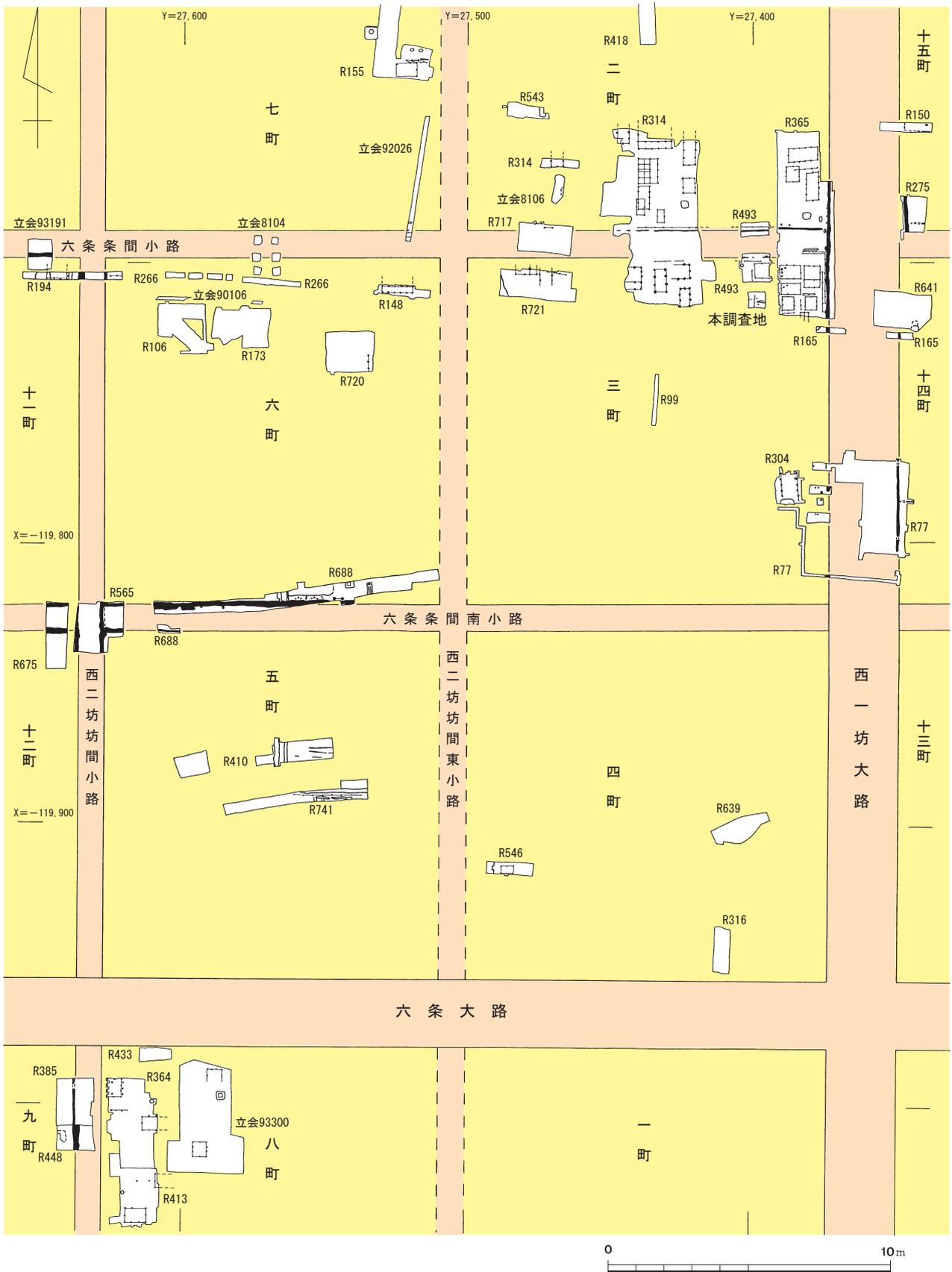
第9図 出土遺物

4 まとめ

今回の調査では、長岡京に関連する柱穴と溝を検出した。調査トレンチは小面積のうえ現代攪乱と後世の削平を受けており、残存する柱穴の検討は限られたものである点は否めない。しかし、その形状は周辺調査地で検出された掘立柱建物の小さな柱掘形と類似しており、一連の宅地利用が行なわれたことを窺わせる。本地点の柵列と溝は、隣の調査地と直接結びつかないが、一定の区画を意図した施設と考えられる。本宅地および六条条間小路を挟んだ六条二坊二町には、方位を異にする建物や建て替えられた建物、礎据え付け穴をもつ倉庫が集中しており、西市の周辺施設を明らかにするうえで注目される。

一方、江戸時代の開田村古図によると当地は下新田と呼ばれており、北方の上新田とともに近世に新田開発が行なわれたようである。古代末から中世の資料は乏しいが、少なくとも下新田一帯に集落が営まれた状況は認められないことから、長岡京廃都後は耕地から荒廢地へ、再び耕地化されるといった農業を主体とする土地利用が行なわれたものと考えられる。

- 注1) 山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次調査概要」『長岡京市報告書』第9冊 1982年
 2) 山口 博・三好博善「長岡京跡右京第165次調査概要」『京都府センター概報』第15冊 1985年
 3) 小田桐 淳「右京第314次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年
 4) 小田桐 淳・中島皆夫『長岡京市センター報告書』第10集 1997年
 5) 山本輝雄「右京第493次調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年
 6) 山本輝雄『長岡京市センター報告書』第24集 2002年
 7) 中島皆夫「右京第688次調査略報」『長岡京市センター年報』平成12年度 2002年
 8) 岩崎 誠・木村泰彦『長岡京市センター報告書』第26集 2002年
 9) 注8に同じ



第10図 長岡京期周辺遺構図 (1/2,000)

調査抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい736じ・かいでんいせきはくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第736次・開田遺跡発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	原 秀樹
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10 - 1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあとうきょう跡 長岡京跡	ながおかきょうしかいでん 長岡京市開田 二丁目213	26209	107	34° 55 13	135° 42 00	20020522	88m ²	道路拡幅 工事
かいでんいせき 開田遺跡			80			20020610		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡	都城	長岡京期	溝、土坑、柵列	土師器、須恵器、平瓦	
開田遺跡	集落				

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第28集

平成14(2002)年9月28日 印刷

平成14(2002)年9月30日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

印刷 株式会社 きょうせい 関西支社

〒530-8688 大阪府北区天満2丁目7番17号

電話 06-6352-2271 FAX 06-6355-2860

